

子供たちのためのデス・エデュケーション (I)

——『いのちの教育』指導書——

ドロシー・J・ターナー

リン・V・エドガー

田代俊孝訳

はじめに

現代を生きる我々は死と終末の問題をタブー視している。そして、当然のことながら、この問題に背を向けようとする姿勢自体が、必要以上の恐怖や無知を増大させている。大人の多くは自分自身の問題として取り組んでいないため、子供にこうした問題をどう提示したらよいのかわからない。実際問題その方法も知っていない。わずか一世代ほど前までは死と終末の問題はどこにでもある人生の通過儀礼の一つであり、家族全員が経験し、実際に関わってきたものであった。豊かな感受性を保ちつつ、論理的かつ事実に根ざした観点から死と終末の問題が提示されていくとき、大人も子供も避けることのできないこの人生の事実に対する“人間らしい理解”が実現可能となる。核家族時代の到来とともに、現前する事実がエイジングのあらゆる場面で距離を置かれるところとなり、また除外されてしまった。「永遠の若さ」はいまや究極の目標であり、「死」とはアリスの不思議の国へと追いやられた。

子供は死とそれが持つ神秘性に関心を抱いている。早い時期から彼らは漫画やテレビを見て、一度死んだ人間が再び生き返ってそのまま生きつづけていることに気づいたとき、死と生とは反転性があると理解するよう

になる。成長にしたがって子供に死という事実についての教育が必要となるであろう。そうでないと彼らは身近な人間の死にどう関わるべきか苦勞することになる。そのつらい時期に多くの人間が安易な解決方法を求めて単なる儀礼的なふるまいばかり行おうとするようになってしまう。

我々は大人になり、あらゆる社会行動の規範について訓練され、それを受容していく中で、自分の子供に対して何でも話し合える関係になりたいと思うようになる。しかしながら現実には愛する人間の死に直面したとき、我々はそうした感覚について語れるようなことばを持ち合わせていない。それなのに死は土曜の朝のテレビアニメだと思っている子供に最も大切な死の真実性や究極性を理解してほしいなどとどうして言えるだろうか。

小学校の教員であり、4児の母親であるドロシーの経験、また同じく4児の母親であるリンのホスピスでの経験は、子供たちが死への感覚を全く認識することも言語化することもできないという事実に関する議論を掘り起こしてくれた。我々は自分に関わっている子供に有益だと思われる情報や補助役の人間を有してはいたが、事実と異なる知識を雲散霧消させるだけの確固たる方法論を持ち合わせていないことに気づいた。我々のたたかいはそれから始まった。精神面での人間らしさを育んでいくための手だてを子供たちにどうしたら与えてやれるだろうか。あらゆる人間の身に降りかかる深い悲しみに背を向けずに関わっていくためにどんなことをしてやれるだろうか。

この認識にたって我々は簡潔で安全な方法論の開発を目指そうと決心をした。第一段階での作業は問題の提示に相当だと思われる時期を設定することにあつた。もはやまやかしを信じない程度まで、急いで子供たちを導いていかねばならないということに我々は気づいていた。ティーンエイジャーとして身体が成熟しすぎてからでは遅い。我々の教育システムから考えればテーマを紹介するのは第5学年が適當である。（つまり10～11歳である）あるいはまた小学校の最終学年までにということで第6学年に提示するべきであるとも思える。（教育システムがミドルスクールを備えて

いるか、中学校になるかで変わってくるが）いずれにしても子供がミドルスクールあるいは中学校に入学する前にこの問題について話し合うのが最良の方法である。というのも（ミドルスクールや中学校に入学した時点で）彼らは校内において最も若い学生であるが学校集団に存在するさまざまなことがらを受容していく目的で、集団への適応や情動の抑制といったものの必要性を感じてしまうからである。10代の後半ともなると彼らの中には強迫観念が強すぎて精神的に成熟した人間と感情面で共有していくことのできない者も出てくる。

死と終末に関する情報の提示が必要となっているような時期の児童の担任になっている教員は以下のことを十分に理解しておく必要がある。児童から見て「ストレスを誘因するような」こうした話題に関するかぎり、大抵の人間が基礎的かつ簡潔な情報をうまく使って効果を上げてきている。ときに若干の修正を加えながら、あらゆる情報がさまざまな場面に応用されていく。また、ときに共に学び、ときに大人に影響を与えながら。

この教科の指導は、我が国における先例としてマステディアの専門家を通じてその方法論が確立されてきた。ジュディー・シャークという女性は担当となった児童に対し終末という事実のとらえ方を示してきた。ドロシーの息子であるグレッグが級友の死を体験すると、シャーク夫人はクラス全体に自分の死生観を語った。この話の中から、実は亡くなった子供の隣の座席の女子生徒が自分は糖尿病を患っているのではと心配していることが分かってきた。そしてまた亡くなった子供は引越してしまったんだとふるまうことで、自分なりに死の事実から目を背けようとする子供も散見された。最終的に子供たちは自己の恐怖心を言語化できるようになった。しかしながら、それはすべてシャーク夫人が基本的な情報を与えてからのことだった。死とは一体何なのか。死にゆく過程で一人の人間が我々にもたらすものは何なのか。そして我々の共同体において葬儀の慣習が意味するものは何なのか。

現実の死によって精神的な外傷を受ける前段階で、もしも彼女の意見を

聞くことができればとても有益なものであろうし、また家族においても同様であろう。議論に耳を傾けながら我々はそう感じていた。死とはある特定のグループに対して秘密裏に忍び寄ってくるものではない。ゆえにこうした教科はあらゆる学生のために研究すべきだと思った。ドロシーの勤める学校の校長であるロバート・ヴァン・ウインクル氏の賛同によって、第1段階として我々はリトルウッドスクールにおける第5学年の児童を対象とした講座を開発した。それ以後より踏み込んだ研究のため我々はどんどん活動を広げていった。

はっきりとした理由もないのに同じ学年を繰り返す児童とも関わりをもった。そんなとき強く感じたのは、当該学年の全ての子供たちにこの講座は必要であるということだった。だから本論で述べられる内容は、この年齢層に必要な特別の教育計画について提示しているつもりである。

〈死と終末の問題〉は子供に死への正しい知識を提供することを目標に、危険のないプログラムを開発してきた。それらは彼らが知っておかねばならない最もやっかいな問題に対する知識であり、今後の人生において必ず直面するものである。その知識以上に子供たちにもたらされるのが「新しい場面に直面したときに感じる情動を記述する語彙力、現在の自分の感情を確認する働き、精神的危機に瀕した場合に有用な援助体制」である。

我々は教育者である。死と終末の専門家として自らを位置づけているわけでもないし、あなた方読者に専門家になってほしいと願っているわけでもない。我々は共同体における他の構成員を応援する立場にあるあなた方つまり、我々のような仕事に関わっている宗教者・医療に従事する人間・ホスピスチームの関係者・文筆家・カウンセラー・研究者、を励ましているつもりである。言い換えれば、精神的に健康で幸福な子供たちと愛を共有し、そのために献身し、そのことを願うすべての人間のためにこの本は存在するのである。

第1章 教育環境

教師の取り組みの姿勢と方針をはっきり持つことがこの課題を児童が首尾よくこなせるかどうかのカギである。授業で紹介される事例は死と終末といったデリケートな問題に関わる場合、とりわけ互いの心を動かす。教師は自分自身の感情について、また課題となる問題について自分がどうアプローチしているのかを知っていなければならない。死生学という分野に関して一通りの知識を学んでいる必要もある。そして学生の要求、親の関心、運営機関の姿勢や各教師のクセ、そして自分自身の思想的傾向について敏感になっておくことが非常に重要である。

自己覚知

教師は死というものについての個人的感情と経験による認識とを客観的に把握できるようになっておかねばならない。例えば、あるホスピスによって示された方針を彼女が採っていくこともできる。たとえそれが実現不可能だとしても、すでに出版されている書物の中には、親や教師そして運営機関に有用なものが数多く存在する。エリザベス・キューブラー・ロスやハネラー・ワス、ラビ・アール・グロールマンなどによって著された一連の書物は、教師が死の問題に対するアプローチを確立する上で示唆に富むものであり、この上ない手だてにもなる。⁽¹⁾

教師自身がそれまでの人生を振り返り、出遇ってきた様々な死をどう乗り切ってきたのかを考えてみることは非常に意味のあることだ。4歳のころ、ペットが死んでしまったとき自分はどう感じたであろうか。自分のクラスに終末期を迎えている病気の子供がいることについてどう自分は感じているだろうか。両親と死についてしゃべっているとき、自分は楽しいだ

ろうか。大人の目の前で感傷的になるとき、自分はどんな感情を抱いているのだろうか。そしてそれが子供との場合はどうだろうか。精神的苦悩の中にある他者とスキンシップを図り、抱きしめて慰めてやることができるだろうか。大人や子供の区別なく、そしてそれが自分の行動よりもはるかに多様なものだったとしても、あらゆるタイプの情緒的反応を受け容れることができるだろうか。このテーマについて授業に入る前に、問題をすべて考えておく必要がある。

感 性

感性は教師のカギを握る要素である。どの集団も他とは違うものを持っているし、各々の経験や興味に基づいていて欲求は異なっているであろう。だから教師は集団全体ではなく集団内の個人を満足させるための授業計画であっても、そこから逸脱してしまうようなことも計算に入れておかねばならない。この単元でのカギは学生たちに自分自身のことを語らせるようにしておくことである。

教師は以下のような子供に気を配っておく必要がある。すなわち他に對して威圧的な子供、分別のない子供、「おしゃべりのためだけに」話している子供、そして特に物静かで傷つきやすい子供である。たぶん、多くの子供たちは死を言語化し、死について経験してきたことを自己確認するのは今回が初めてである。そのことが子供たちの行動によって示されていく。どの子供にとっても自己を知るといことがなるほど楽しいものであると感じさせるためならば、教師は必要とする時間を割くべきである。楽しいことに子供が無関心ではいられない。また教師には洞察力が備わるようになり、結果的に児童間の個人差に気づくようになる。

話し手について

その講座を担当していく人間が学級担任である必要はない。カウンセラーやメディアの専門家、他の有能なメンバーなどが低学年においてさえ

もこのテーマの話をするし、時には関心を抱いて資格を得た親であることさえある。（ところで）これら外部の専門家がやってきて話をする前に、やるべきことがいくつかある。担当する学年のレベルを考えたときに紹介者が適当な話をするか。そして（その学年における）人間の知的・情緒的発達について正しい見解を持っているかどうか。それらを予め確認しておくべきである。この講座に関わる各個人には柔軟な姿勢や理解、そして情報へのアプローチの仕方と個人間での意見の相違を認める考え方がほしい。彼らはまた後に示すような語彙表を使うべきである。教師が鈍感だったり学年のレベルにそぐわないようなら生徒はこの講座を理解しないだろうし、また興味も示さないであろう。

地域の援助体制

地域の援助体制が子供や親、そして教職員たちにたいへん大きな意味を持つことを教師は意識しておく必強がある。この概念は医療やメンタルヘルス、宗教そして葬儀サービスまでを包括するものである。各機関が提供する情報が何であるかを把握することができたなら、それは教師として賢明な策である。提供されたサービスの中には子供にとって不適當でも親には有効な情報もあるだろう。

教師は心の危機に陥ったときに親が参考になるような児童心理学者の文献リストを用意しておくべきである。その地方に存在する緊急センターの電話番号は、学生と親の双方の有用なものとなる。現代社会において精神的補助の必要性が一般的理解となってきたため、今日の地域社会におけるメンタルクリニックの数は次第に増えている。確認するがこれらの団体が行っていることは何なのか、そしてあまり良くない点があるとすれば、それは何なのかに十分注意を払うようにしなければならない。

生徒も親も使えるようなパンフレットや書物も役立てるべきである。多くの企業が授業で使えるように教師向けにそうしたものを提示している。葬儀屋は無償で配ることのできるものを数多く持っている。⁽²⁾ こうした援

助はその存在を知らないがゆえに用いられていないことが多いけれども、あらゆる地域に置かれている。

〔生徒に関して〕

家族史の記録

家族史の記録⁽³⁾は、子供の意識化されない記憶を教師が知るためにたいへん大きな役割を果たす道具である。それは子供の死への考え方を通じて親の考え方も端的に示すものである。このことは子供が現在において意識しているものと一致するかもしれないし、あるいはそうでないかもしれない。ただ、こうした多様性は死に対する子供のありのままの姿を考える場合に見逃せないものである。

親そして子供の認識

解決方法のない死の問題、あるいは死に関する過去の経験によって子供がこのコースを受講することによってためらいを覚える親もいるかもしれない。これらの問題については保護者会で教師が説明するべきである。単に子供たちに紹介するだけではなく、講座の構成についての紹介と討議を経れば親のほとんどが安心するようになる。もしそうでなければ教師は一人で、あるいは校長や学校指定のカウンセラーとともに親たちとプライベートな話し合いを持つのもいいだろう。

多くの親は自分の子供が死に関して抱いている様々な感情を理解していない。死に関して非常に鮮明な記憶を持っている幼児がいるのも事実だ。

（ただ多くの場合）ことばにする力がないため、あるいは喪に服する間、意識の外に排除されていた見知らぬ何かへの恐怖のために彼らは感情を表現することができない。こうなってしまうと子供たちは死に対する歪んだ見方をずっと抱いてしまうし、その恐怖心を募らせることによって生ずる悪夢にうなされ続けてしまう。抑圧されたこの種の記憶が教室内で討論に

よって呼び覚まされるとき、彼らは時として感動的な姿を見せてくれる。突然ただ号泣する者もいれば、完全に情緒的表現を示すことを忘れてしまう者もあるし、教室からでていってしまう生徒さえいる。家族史を考えていくのならば、教師たちは生徒の持つ潜在的な情緒反応に対する敏感な感性が求められる。

この講座で紹介された情報やデータを子供たちに理解させ、自ら進んで反応させていく方法は数多い。教師はあらゆる場面にきちんと対応できるような準備をしなければならない。反応のなかでも特別なものは後で論じられるであろうし、より突っ込んだものは後の第5章「カウンセラーの章」で取り扱うこととする。

もしも心の危機に陥っている子供がいるならば、教師は講座を延期し、後日適当な時期に再び行うことにした方がよい。こうした危機状態に必要なのは、全体的な立場から集団として直接援助できるようなアプローチである。こうしたケースは学区内での自殺や級友の死、そして教師や校長、スタッフの死などを指す。このようなときにはグループ全体に劇的な変革が望まれるであろう。⁽⁴⁾

親の関与

両親はグループに参加してほしいとする教師の要請に応えるべきである。これは親としてのふるまいを可能にする道を開くものである。参加しようと思っている親は自分が出席したいと思っている授業について教師にその意志を示すべきである。反対に教師は講座の期間中に自分が期待している保護者像について親たちに説明すべきである。親の参加によって子供たちは親を共に学ぶ仲間として見ることができるようになるし、そのことは家庭内で今後家族同士が意見を交わせる機会につながるものである。

教師は講座の期間中、親の相談や呼びかけに応じられるようにしておくべきである。それから、もし子供に今まで家族と共に味わっていないような情緒的欲求がみられるようであれば、教師は積極的に親と接触したほう

がよい。

自分の授業に親が参加していくにあたり、教師が考慮すべき事柄がいくつかある。教師が本質に抱く関心は子供の情緒であって親の関心ではない。もしも親が出席していることで子供たちに感情的な抑圧傾向がみられると感じたならば、教師は親に参加を見合わせてもらうよう話をすべきである。教師は努めて自分の教室に部外者の大人が立ち入らないようにしなければならない。他の問題を教えている場合でも教室の中に親のいることが教師にとってあまり気持ちのよいものでないと感じているならば、死と終末の授業期間中に親を教室内に呼ぶことが賢明な取り決めであるとは思えない。

〔学校に関して〕

運 営 機 関

授業の進行についてアドバイスできる管理職をきちんと配置すること。そしてそれに対する子供と親の反応を知っておくことは大変重要である。その管理職とは集団内に何か問題が生じたときに親たちが自然に近づこうとするような人間であらねばならない。だからこそ子供たちに何を教えているのかきちんと把握することが大切になってくる。校長はどのように、そして何故その教材が紹介されたのかを知っておく必要がある。たとえその地域の役人に質問されることがあっても、把握している情報がよければよいほど自信をもってためらいなく全ての質問に答えることができるであろう。この学校はよく考えながら運営されており、今後も子供を害することはない。積極的な態度は質問者にこうした安心感を植えつけるものである。保護者会に、そして子供たちへの問題提起の際に校長を呼ぶことを忘れないように。

教 職 員

担当外の教職員に講座の紹介をせよ。今日、我々の社会における多くの

大人たちは死を直視しないし、どう対処したらよいのか不安を抱いている。教材をオープンにし、危険のない状況で紹介していくことで、他の教職員や管理職は人々の語ることばの裏に死への（潜在的な危険解決の）力の源を見いだすであろう。教職員たちは人間の死について自分が見てきた儀式や堅苦しい習慣を説明するために呼び出される。サポートする教師たちは子供たちに提示した教材の意味を強めることができるし、それを展開させることもできる。人々がその授業に夢中になればなるほど、教材は同一のケースだけでなくいろいろなケースにわたり学習はいよいよ深まっていく。本人にとってはそれが「小さな死」であれ「大きな死」であれ、子供たちが死に苦悩する場面で口にしてほしい（危機を乗り越える）力の源の数も増えていく。⁽⁵⁾

教職員は様々なタイプの人間から成り立っているはずだ。死とその深い悲しみの体験に基づいて彼らはグループに紹介すべく様々な態度を示すであろう。学生にこの講座を紹介したいと思っている教師は、同僚の反応が肯定的なのか否定的なのかをよく知って受け入れていかなければならない。

地域の認識

この講座は親のみならず地域のメンバーに活動状況を知られるであろう。特に子供たちが埋葬地や葬儀場に連れていかれたとき、このことは事実となる。

伝統的な社会通念に基づくために、子供たちは地域社会の眼にさらされるだろう。葬儀場のたくさんの駐車場の中で、大きな黄色いスクールバスを見るなどということはかなり奇妙な光景である。行儀がよく真面目そうな10～11歳の子供が適切なマナー通りに行動しているのを良しとすることが人々にはかなり満足感を与えるのに対して、もし子供たちが伝統的な行動様式にのっとって教育されつづけてきたならば、彼らは葬儀場において畏敬に満ちた行動をとるであろう。

子供たちが埋葬地に行くとかかなり礼儀正しくふるまうようになる。彼らの最初の反応といえば、えも言われる重苦しさを感じて何があるのかを確かめに墓地や柵の中に足を踏み入れることすらしないのである。付添いによって安心を得ないかぎり、彼らは墓地の上を歩いてかまわないとは思わないであろう。

彼らは自然と地域の歴史や民族集団に興味を抱くようになる。具体的には墓石の造形美や石碑に刻まれた詩的表現などを通じて。彼らは埋葬地の静けさと美しさを感じ取れるようになるから、そうしたふるまいが可能になるのである。

子供たちが示す情緒的発達としなやかな感性には眼を見張るものがある。野外実習とともにこの単元が終了するときには、彼らは自信を持つようになるし、死への恐れや迷信を抱かなくなる。最終的に自らの意志で埋葬地にピクニックに行くようになる。

グループの規模

1クラス定員は必ず25～35人に制限した方がよい。この規模のクラスであれば個々の体験や考えそして問題を共有する発信源になる。大人数で教えることは可能かもしれないが、そこには大集団の中にあって風通しの悪さを感じ、授業への参加も自己の定着も見込めない子供たちが目立つだけである。10～15人の小集団もかまわないが、質疑応答や体験談は30人のグループほどバラエティに富んではない。

補助的な教師

この講座の責任者として少なくとも2人の人間が必要であることを強調したい。この人選は2学年にまたがる教師たちでもかまわないし、デス・エデュケーションに関心を持って資格を取得した低学年の教師でもよい。できれば教師が一人に対して学校指定のカウンセラー、あるいは教科の専門家からチームを作るとよい。あるいはこの分野に関して造詣の深い親と

のペアでもよい。その学校に勤務する看護婦ももう一人のメンバーとして適任である。

チームを編成する上で重要な要素は、どの集団も死と終末についての自己の感情そしてお互いの感情を理解しておくことである。そうすれば彼らは子供が最も関心のある事柄について息の合った仕事ができるにちがいない。子供たちにどのような情報の紹介をしていくのか。お互いに納得してやるべきである。授業計画とその準備にこそ講座の成功を左右するものであることを銘記すべきだ。その際、体験は柔軟なコース運営に最も有効な道具になる。

ある基本的な必要条件がこの単位において満たされ続けるべきである。子供たちが責任者としてたやすく判断できるような2人の大人が必要なのである。野外の実習を除けば、一度に30～40人を越える大集団に題材が紹介されるのは好ましくない。部屋にはグループに心地よさを与えられるように十分な広さが欲しい。

授業の間、教師は子供たちの中を歩き回ることが大切である。与えられた題材によって感傷的になっているようなら、肩に手をおいたり、微笑んであげることで彼らに大きな安心感を与えることができる。もしもある学生が1対1で何か人格的な触れ合いを共有したがついているときには、部屋に別の教師を用意することも大切だ。もう一人の教師は子供を静かな場所へ連れていって、彼が身をもって感じていることについて話し合うとよい。

どのレッスンの後にも、使用された題材についての生徒の反応について教師は評価しなくてはならない。今後のレッスンに組み込もうと省略された題材は、そのどれについてもきちんと記録しておくべきだ。議論を通じて学生たちが示してきた方向を踏まえて計画を修正した方がよい場合もある。

教育界の現状を反映したさまざまな教授法を学校側はシステムとして持っている。ある学区の特性上成り立っている教育環境があったとしても、この講座は効果的に教えられていくべきである。さまざまなタイプの環境

を考えると、そこには肯定と否定の2つの側面が必ず存在する。最も包括的なアプローチは学際的な方法論である。これは以下にあげる教授法にいずれにおいても遂行されるべきである。具体的には組織化・均一化された集団、あるいはまとまったクラスといったものだ。このやり方の特徴は、教師個人のスタイル、学校のスタイル、地域的制限のあらゆるものに適合していくことにある。

組織化されたもの

学年別に組織される学校で、この講座は科学あるいは社会科の授業として一つにまとめられている。くれぐれも教師がカギになっていることを忘れないように。もしも教師が題材に心地よさを感じないならば、その単元を教えたいといわないことだ。科学において、死の問題は人体という項目の1カリキュラムとして学習される。あるいは人間の発達という項目とは反対のポイントとして考えられている世界の文化研究という観点からその単元は社会科のカリキュラムに組み込まれている。

視点によっては他のテーマもこの講座に含まれる。読書好きな教師は死と終末という題材について書物からの教示を受けることができる。リストを用いて重要な語彙を示すことも可能だ。世界の文化やそこでの死に対する取り組み方が示された調査書を学生たちが読みこなそうとすると、語学の教師は頼もしい補助役となる。碑文は詩の形式論として研究される。社会科の教師なら、死の時刻の決定や安楽死について州の法律について議論ができる。埋葬地の墓石やその事務所に残された記録からは地域社会の形成史について論ずることができる。死に直面したときに家族がどう立ち向かっていくのかを述べる目的で、法律や保険の専門家のようなゲストを招くことは社会科の学習にとってもまた有効なものである。数学的な手法が現実の生活といかに関連しているのかを子供たちに示したいのなら、グラフを使った統計的な情報はリアル体験をもたらす。葬式の値段や健康保険および生命保険の購入と返還を通じて学生たちは一人の消費者として

数学的な理解を学ぶことができる。組織化された教師集団に制限を加えるものがあるとすれば、それはただ彼ら自身の創造性と時間的要素のみである。

均質化された設定

生徒を均一に集団化している学校においては、講座の方向と深まりが生徒たちの教養のレベルを語るものになるであろう。あらゆる集団にこの講座が求められている。平均以上のあるいは優秀な生徒のためだけではない。実際に平均あるいはそれ以下の生徒のこの課題に対する要求は、その他のレベルの生徒よりも大きいといえるであろう。死によって誰もが急激に感情の変化を引き起こすし、そうした認識は年齢や教養の如何に関わらず確認され、意識されるに違いない。

ある子供が優れた知的能力を持っているとすると、その能力をより成熟したものと考え、またあらゆる理解を可能にするものととらえる。——社会というものはこう考えがちである。しかしながら人間の情緒的側面に関するかぎり、それは真実ではない。優秀な子供たちは小さな大人ではないのである。彼らはこの講座によって示される情報を求めている。ただ、いったん彼らが情報を手に入れば、より突っ込んだ角度からこのテーマに広がりを持たせ、探究していくことができるようになる。彼らの分析や推論そして現実性の立場からみた死への認識は親や教師を驚かせるはずだ。

平均的な子供は実体験とそれにまつわる自分史の豊かさをもって教師たちに挑戦状をたたきつけるだろう。この集団でカギとなるのは全ての人間に話をさせることにある。集団の持つ多様性に配慮して教師は基本となる情報を提供しなければならないし、たとえそれがどんなに単純であろうとなかろうと子供がどんな質問もできる自由な雰囲気味わえるような環境を作っておかなければならない。もしも自由を満喫できるような雰囲気を作り出すことができたなら、学生たちは優秀なレベルの子供以上の質問をするかもしれない。その質問も「人はなぜ死ななければならないのか」と

いうものから「我々はどうして昆虫のいるような野原に人間を埋葬する必要があるのか」とか「あなたの死後に起こると予想される様々な事柄を人はなぜ行っていくのか」という風に変わっていくかもしれない。

平均以下の学生と関わる際には具体的な情報から始め、話題の流れのなかで示されていく彼ら自身の理解を尊重していくようにしなければならない。学生たちはふつう心理学でいう〈不思議な段階〉にある。彼らの恐れや疑問、誤った認識などが教師に物語となって示されるであろう。この情報は彼らの学習にとって可能な限り用いられるべきである。自分の体験を演じ、絵に描き、共有するために彼らはより多くの時間を必要としている。こんな彼らへの情報をかみくだいて示していくことに、もしも難しさを感じているような外部の人間がいるなら、教師はその人物を選ばないと決めた方が賢明であろう。

あらゆる子供たちにとって授業による収獲があるだろう。各々の集団に相応しい情報の総量と多様性によって教師の判断は示されるであろう。彼ら教師の責務とは各々のグループがさまざまな要求を持つ個人から成立していることを忘れないことである。

ま と ま り

この種の事柄を教える際に特定の利点があるが、まとまった教室にはいくつか存在する。教師は自分のクラスの個人に関する知識を深めてきているであろう。一年を通じた議論のために家族環境も解ってきているだろう。あらゆる質問が受け容れられ、あらゆる感情が意味を持つような教室の中に流れるおごそかな雰囲気。教師はそれを確立しているであろう。こうした状況に置かれるなら生徒たちは最低限度の恐れや憂鬱だけで、たやすく自発的に死についての情報を受けとっていただけるのである。

時間的な問題はできるだけ融通しなければならない。生徒たちがそれを望むのであれば、教師は割り当てられた時間を越えてでも議論を続ける道を選んだ方がよい。「どれ位の授業時間数がこの単元の授業の中に盛り込

まれるか」についての決定権を教師は持っている。こうした環境は詳細で学際的、そしてきめ細かい学習環境作りに大きく貢献している。

比べてみると生徒30人編成のまとまった教室はあらゆる学年全体よりもむしろ情報に触れているかもしれない。この一つの根拠は各々の教室を巡回する教師の存在にある。組織化され能力別に分けられた状況にあると、あらゆる学生が同じような情報にさらされる。これだと明らかに同一の視点に立った情報を誰もが受け取ってしまうはめになる。どの場面においてもそこには肯定と否定の両方の側面があること、そして講座の成功は題材を紹介する人間にかかっていることを再び思い出してほしい。

情報源となる教師

あなたの学校で情報源となる教師は、また講座の質を高めていくこともできるし、生徒に対して豊富な体験談を語っていくこともできる。音楽の先生であれば鎮魂歌（レクイエム）を作ってきた音楽家についての学習を示すことができる。バッハやモーツアルトやジャズ・ミュージシャンにいたる多くの作曲家が自国の文化における死に注目して曲を作っている。各世代に好まれる歌の多くは死や突発的事件、そして自殺へのメッセージが含まれている。他の文化圏について学んでいると、そこに特筆すべき音楽的な要素があることに気づく。すなわちそれは習慣化され、何世紀も前に起源を遡ることのできる葬式やお通夜で用いられてきた音楽の存在である。音楽教師との関係はこの講座に大きな進展をもたらすし、音楽教師が提示する教材は教室内で示されたものと一致する場合さえあるくらいだ。⁽⁶⁾

美術科の教師は世界の芸術家の研究として、また彼らの死に対する意識の研究としてこのテーマを扱うことができる。学生たちはある特定の絵画に込められたストーリーについて学んでいくことができる。何度も死に直面し、死を経験する中で画家たちは死への態度を学んでいったのかもしれない。あるいは深い悲しみと哀悼を経験しながら日々を送ってきた家族によってその絵画は描かれたのかもしれない。石器人やアメリカインディア

ンたちは生と死の体験を語るために絵を用いたのである。多くの場合、こんな芸術活動が文字を持たない文化圏の歴史と我々をつなぐ唯一の手段となっている。死を描写する形で創作された彫刻もまた数多く存在するし、それらは現在においても美術のカリキュラムで採り上げられている。⁽⁷⁾

体育の教師、メディアの専門家そしてカウンセラーもまたこの講座において大切な役割を果たす。多くのゲームは死をテーマとしている。⁽⁸⁾これは大人が決して気づかない事実だ。メディアの専門家は親だけでなく子供にも有益なものとなるべき多くの創作や事例を知っている。カウンセラーは情緒に関するセッションについて参加してもらうことが可能であるし、講座に関わる人間をサポートしてくれる。

この単元は多くの訓練に組み込まれるべき触媒の役割を果たすであろう。それを阻む唯一の条件とは時間であり、財政上の問題であり、創造性であり、そして各チームに生ずる情緒的な防衛規制である。

結　　び

教育環境はこの講座にとって非常に重要な意味を持つ。たとえ各個人がこのテーマに重要性を見い出していったとしても、ここで掲げた教育環境の全てについて考えることがなかったならば、彼らは講座に対して正当な評価をしないであろう。クラス担当の教師はこの講座を収獲の多いものにしようと準備する前に、自分自身や担当する学生、その親、教職員、そして学校と地域の認識レベルも含めた運営機関についてよく理解しておかなければならない。

メモ：

- (1) 巻末：「参考文献」参照。
- (2) 巻末：「パンフレット」参照。
- (3) 記録用紙：巻末掲載。

- （４） 第５章：参照。
- （５） 付録：「生活の場における喪失体験」参照。
- （６） 巻末：「音楽」リスト参照。
- （７） 巻末：「美術」リスト参照。
- （８） 第４章：「ゲーム」リスト参照。

第2章 授業の前に考慮すべきこと

この授業の実施にあたっては、数多くの細かな事柄のチェックが必要である。また、それらの項目の準備の時期が考慮されるべきだし、計画的になされるべきである。スケジュールを固定していかざるを得ない行き先については特に大切である。外部からお話に来てもらう人の人選と講座全体におけるその講師の位置づけを調整していく必要がある。また、教材をきちんと収集し、授業を意味のあるものにしていかなければならない。そして、ミーティングおよび野外学習の日時の決定が次の課題である。そのために事務的手続きも準備する必要がある。授業を始めるに当たって教室の住環境も整備しなければならない。授業の円滑な運営を確かなものにするため、見落とすことのないようあらゆるポイントを記したチェックリストが、いつでも必要である。

クラス担当の教師

授業を通じ、教師自身が学生や親にとって大きな役割を果たすことになる。子供が個人的に話したいのであれば授業の後でも教室内に教師がとどまっておいた方がよい。与えられた情報への積極的な姿勢はこのテーマをこなしていく上で見逃せないものとなる。

話 し 手

話し手との打ち合わせは授業開始前に終らせておくべきである。多くの場合、学生が話者を受け容れ理解していく前に、いくつかの背景となる情報を彼らに理解してもらう必要がある。たとえば呼吸が停止を始めたとき人体に何が起こるのか医療関係者なら当然議論しているであろう。そんな

事柄を学生たちは知りたがっているのである。また外国人の話者が独特のアクセントで話すことやその人物のことは理解しようと一生懸命耳を傾けたいくなるような、そんなことを知りたがっているのである。もしも生徒たちがこれらの点についてきちんとした準備をしているならばスムーズにいくであろう。

子供たちに話してもらうために教室に来てもらえるような人は数多くいるはずである。子供たちが理解できるような内容と言葉づかいで話すことのできる大人が必要なのである。また自分たちも話し手と共感できると思ってくれのような子供たちであることが求められる。教師は自分たちが子供たちに提示する情報の程度について講師に教えておかなければならない。自分の問題として実際に死に怯えている学生がいる場合、あるいは小さいときから情緒的な反応を引き起こしている何かを抱えている学生がいる場合には話してくれる人物の全てにそのことを伝える必要もある。必要であれば、それが何を引き起こすにせよ話し手は自ら子供あるいは親に語っていくべきであろう。

ホスピスに勤務する看護婦や医者は、授業で話してもらうのに非常によい。講座の概要も含め授業で提示されるべき情報のタイプについて彼らに教えておくことがその際、最重要課題となる。どうして死にゆく人々といっしょにいたいと思うのか。子供たちはそのことについて最も大きな関心を寄せるであろう。忌憚のない応えは子供たちに受け容れられ、理解されていく。呼吸が停止を始めたとき人体に何が起こるのかに関する議論は最も有益である。死にゆく人間が作りだす雰囲気についての説明は、彼らが常に耐えがたい痛みにさらされているのではないかという懸念を学生たちから取り除くのに役立つものである。学生たちがストレートな疑問をぶつければ、話者が彼らの年齢と語彙に見合った直接的な応えを自ら積極的に与えていくときに、この授業は意味のあるものとなる。

外国人の話し手

講座に参加してもらうのに他に適当と思われる人は、自らの宗教的・文化的習慣によって、迷信的な死への伝統的関与を除去してくれるような外国人である。特に外国人生徒を抱えているのであれば多くの理由で効果的である。その子供は先祖から受け継いできたものに誇りを感じている。話し手の発音が非常にはっきりとしているならば、教師は子供たちがその話にきちんと耳を傾けられるように、そして聞こうとする意識をもって注意を払うだけで話はよく理解できるようになることを説明しておくべきである。話者が意見をまとめ終わったとき、そして質問がなされる前に、教師は必要であればその話を繰り返すこともよい。

たとえばヒンズー教徒の習慣はほとんどの学生にとって新鮮に映る。ヒンズーにおける火葬の儀式は死の事実に対する一つの意味を我々に提示してくれるであろうし、それゆえアメリカの儀式の一部を紹介することに比べて多くの学生たちの理解を可能にしてくれるだろう。肉体は焼けても精神は解放されていくというような発想は学生たちに簡単に受け容れられる。自分たちとは全く異なった習慣や思想に対して彼らは寛容になっていく。質問をする機会も、そのテーマに関してよく知っている人から答えをもらう機会もある。学生たちは教師が読んできたものだけを耳に入れようとはしないが、彼らとは異なる観点に立ったストレートな紹介には素直に応じるであろう。

牧師 (チャブレン)

チャブレンが授業に招かれるかもしれない。人物を注意深く人選していく必要がある。公立学校においては全ての人間の宗教的あるいは無宗教の信念を侵害しないように配慮することがほんとうに大切なのである。牧師 (チャブレン) からは事実に基づいて次のようなことがらを紹介してもらうべきである。すなわち自己の価値観をはさまずに様々な角度から自らの宗教的体験や人間としての体験を語ってほしいのである。身分の保証さ

れている病院のチャプレンはこの講座にとって素晴らしい情報源である。

あらゆる儀式や文化が学生たちに確実に提示されていくための他の方法としては、パネルディスカッションがある。このとき、教師は地域に存在するあらゆる宗派の代表者を招待することができる。

カウンセラー⁽¹⁾

感情とその適切な表現方法についてカウンセラーは子供たちに話しかけることができる。また学生たちにいつでも話し合う気があることを伝えることができる。きちんとした援助体制があればあるほど、たとえ精神的危機が生じてもそれに対する正しい対応のチャンスを学生たちは得るであろう。

葬儀屋と共同墓地の管理人

葬儀屋と共同墓地の管理人は教室ではなく自分の仕事場で学生たちに話しかけるだろう。双方とも講座全体に対する学生たちの認識を劇的に変えていくものである。学生たちは時に身の回りにある風景におびえるから、彼らの気持ちが和らげられ自分が理解されていると感じることは決定的な意味を持つ。そして、子供たちにそれらを保証できるかは講座を左右する重大項目である。

情報源となる教師

体育の教師は講座についての相談を受けることになる。死に関係する様々な子供の遊びは身体教室プログラムの一部になるのである。こうしたゲームを集める必要があるし、体育が行われるときのために（必要があれば教材等を）用意しておくべきである。子供の中には教室内での講義の後に身体のエネルギーを発散させたいと思っている者がいることを教師は意識しておく必要がある⁽²⁾。

いろいろなタイプの音楽が子供に対して準備されるべきである。それら

は講座の期間中、教室での授業だけでなく音楽の教師によって使われもする。音楽テープは様々なジャンルのものが必要だし、そこにはタイトルと作曲者のリストが掲げられておく必要がある。深い悲しみに際して用いられる曲には次のようなものがある。「偉大な作曲家によるミサ曲」「アフリカ民族の音楽」「現代の〈ポップ音楽〉」「ニューオリンズの葬式で伝統的に用いられるようなジャズ」。教室の中を、あるいは音楽の授業の中で、そのテープはBGMとして静かに流れていく。

美術の教師は死を主題とした偉大なる作品を子供たちに紹介していくことができるだろうし、そしてまた芸術作品を通じて彼らが自分自身の感情と体験を表現していくことを手助けすることができるであろう。芸術は自己の感情を言語化することが苦手な子供にとってとりわけ重要な道具である。マイナスの要素として歴史的に抑圧されてきた死。その死の状況に直面したことのある全ての子供たちにカウンセラーが関わろうとすると、芸術はまた一つの道を与えてくれる。

危機を援助するグループ

精神的危機状況を援助できるグループの住所と電話番号は子供たちや親に有益である。各グループが関わった危機状況の事例をメモしておくならば、大きな手助けとなるだろう。学生たちが家に持ちかえって家族と共有できるように一覧表をコピーするとよい。目的は学生や親が必要であれば援助を受けられる場所を提示することにある。

〔スケジュールの設定〕

年間の日程

講義がいつ行われているのかを把握しておくことはとても重要である。お互いを知り、グループとして結束していくために学生たちは時間を必要としている。彼らはしっかりした信頼のおける尊敬すべき教師であれば、

その教師との関係を確かなものにしたいと思っている。反対に教師は同じ姿勢で担当する学生と高め合っていかなければならない。この関係がしっかりしたものとならない年度始めにこの講座を提示するのは無神経であろう。

お互いの一体感はハロウィンによって生ずるだろう。幽霊と意地の悪い鬼になるこの休日の行事は、死に対する否定的で戦慄すべき側面を思い出させるだろう。また木々が葉を落とし、身の回りから豊かな色彩が消え、暗い感情が人々を支配するような時期にもあたる。

ハロウィンが終わるとすぐに冬休みがやって来る。家族との時間を過ごすため忙しいから、講座を組むのにふさわしい時期ではない。長い冬休みの時期にスケジュールを組むのはよくない。冬休みの後では天候が問題となってしまう。テスト期間とぶつからないような講座日程にすることができれば、春は明らかにスタートに相応しい。

人間の繁栄と発達もまた多くの教育機関で扱われている特別な講座である。論理的に考えるならば、死と終末の授業は人間の繁栄と発達が終わった後に開かれるべきだし、エイズの講座の前に置かれるべきである。この方が学生たちに意義のあるものとなるであろうし、これら3つの問題における相互の理解を助けてくれるものになるだろう。

天 候

天候は考慮しなければならない大きな問題であり、季節による環境の変化が激しい場合ではとりわけ注意を要する。これらの場所において、天候の予想できない5月あるいは4月の初旬に講座を紹介するのは賢明とはいえないだろう。穏やかな太陽が差し込み、生命の躍動と誕生にあふれた暖かい春の時期に講座を開始するのがベストである。ただ、野外学習をするには7月あるいは8月では暖かすぎて不快になる場所もあることを考慮しておく必要がある。スケジュールを組む前に、住んでいる場所にとって適切な状況とは何なのかを頭に入れておくことが大切である。

天候も子供の感情とそれに基づく行動にとって一つの明確な役割を果たすのである。感受性訓練が提示される日は太陽の輝く晴天の日が望ましい。何故なら、晴れの日が情緒面でも情報面でもパワフルであるからである。もしも太陽の差さない、ものさびしい、何となく気分の重い日であれば、教師たちは明るいい色に服装を心掛けるべきである。学生たちのムードを盛り上げるのに役立つ積極的なことばの書かれたポスターや瑞々しい花、あるいは大きな造花などを持ってきても意味があるだろう。些細なことだと思われる留意点もあるかもしれないが、講座の雰囲気盛り上げを考慮に入れるべきである。

講座の持続

講座はそれぞれ3～4週間以上の一連の流れの中で計画されるべきである。それぞれのセッションは少なくとも45～60分の時間が欲しい。子供がレッスンに夢中になっているときに、可能なかぎり議論を続けられれば申し分ない。

情緒的なものが一気に吹き出してくるから、週末にならないうちに質疑応答が完了していれば一番よい。月曜日まで教師が学生に会うことがないので、金曜日は新しい教材を提示するのに良い日とはいえない。個人的な体験談のために、より多くの時間が必要になったときは、水曜日を記述と談話の日とするのもいいだろう。

理想的には、学生たちが昼食や体育、あるいはレッスン後の休憩のような休息の時間を持っているべきである。このことは彼らが鬱積したエネルギーを放出し、ペース配分を整えることに役立つだろう。もしこのテーマが学際的な講座の一つとして教えられているとき、死の問題を扱っている他の教室に直接彼らが足を踏み入れることのないようにすべきである。感情という授業の後や葬儀屋と共同墓地のビデオを観た後には情緒的なものが吹き出すから、特に注意を要する。

事 務

講座開始にあたって必要な書類は全てコピーをとって、配付用に準備しておく必要がある。授業が開始可能になる前に親宛ての書類を用意しておかなければならない。これには親への手紙、講座の日程、承諾書そして家族史のメモが含まれる。

親への手紙は家族に幅の広い背景となる知識を与えるだろう。講座の日程から親たちは自分の子供が各レッスンで議論していることがわかるだろう。家族史のメモは教師が背景となる知識を得るのに欠くことのできないものである。これらは講座の期間中に起こるかもしれない問題に対する準備をすることもできる。承諾書は上級の講座への参加のためにファイルしておかなければならない。

教師は子供たちの健康問題を意識しておかなければならない。それは医療に従事する人の話や写真、あるいは書物によって配慮が可能となる。もし話し手が「この患者はぜんそくをもっており、合併症を起こして結果的に亡くなった」というようなコメントをしたときには、ぜんそく持ちの子供に大きな心配と不安をもたらしてしまう。話し手によってこの種のコメントが出されたときに、教師は子供たちの反応を観察する必要があるし、また子供に個人的に話しかけてコメントの真意を明らかにしたり、子供のところに誤解が生じないような説明をしたりする必要がある。

死別の体験を最近持った子供を教師は確認しておく必要がある。ペットの死でさえも、幼い子供の人生には極めて大きな衝撃的事件となる。教師は元気を回復した子供をメモして、それ以前の話を聞くために親を呼ばなければならぬ。この事は最小限で未来の問題を処理するのに役立つだろう。授業を選択することを許可されなかった学生たちに対しても手配が必要である。

どんな分野についても子供たちが問題を抱えることが予想されるから授業の準備として、教師たちの記憶が鮮明になるようデータ表を作っておくことは大変役立つ。情報と事務処理に関する準備の全ては問題の円滑な紹

介を容易にすることだろう。教師は自分の情熱を準備と学生の反応に費やすべきであり、講座開始前に準備可能なものに余計な力を使って、イライラしたりする必要はない。

授業の運営

座席の位置は全ての学生についてお互いに向かい合うよりも部屋の前方向に向くようにすべきである。これは子供が泣きだしたような場合において特に需要である。見られたり指さされたりすることのない状態で泣けるようにすべきである。特定の分野における議論で互いの視線が合うときに起こる神経質な笑いを防ぐのに、この配置は意味を持つ。また、写真やビデオが使われたとき、動き回らなくても子供たちが画像を鑑られるようにすべきである。少々時間が経っても価値のあることだ。もしもこれらの項目をそう考えることができれば、もうそれで小さな問題のいくつかはなくなったのである。

色 彩

教師がテーマの受容とともに、手助けとして意識しなければならない不思議なことがある。講座の期間中に身につけている服装の色合いと同じように室内の色彩にもきちんと注意を払うべきである。黒はたぶん身につける必要のない唯一の色である。赤は、飛びちったようなデザインではなく図柄の一部であるかぎり問題はない。学生の中には血として飛び散った赤を見てしまうものもいるのである。明るい色は常識的な線で身につけるべきであろうが、首に赤いスカーフを巻いた状態でダークブルーや茶色、紫色の服装をするのは注意が必要である。

教室にいる間、子供たちに相応しいポスターを目に入るような位置に貼るべきである。子供たちや親にとって野外学習に行ったときの先輩生徒の明るいポスターはもっとも良いものとなる。講座の最初の年であれば、葬儀屋や共同墓地のスタッフの写真でもよいだろう。

専門的な援助を創造する

重要な項目の一つに講座の初日から授業時間を通じ机の中にティッシュの箱をばらまいておくことがある。子供も教師も講座の期間中、時には情緒的になる。教師たち、子供たちは必要としている人間に対して、軽く抱きしめたり、肩に手をやったりして速やかにティッシュを渡す。涙を誘うような出来事に助けの手を差し伸べようとしている人間との関わり方について彼らは知りたいと思っている。生徒の振る舞いに対する教師の期待は彼らに明確にしておくべきである。あざけりやからかい、そして他のあからさまな振る舞いは受け入れられるべきものではないことを彼らは知っていた。

保護者会

講座の開始と一定の方針に基づく運営とが可能になる前に、多くの取決めがなされなければならない。保護者会の日程と時間は最も多くの親が参加できるときを考えなければならない。親が時に目にし、拾い読みするのに適した講座用の題材を手に入れておくことが大切である。親が講座に関して感ずるどんな質問についても、教師は準備しておかなければならない。

死と終末に関する本は図書館で手に入れることができる。⁽³⁾ 親に対する参考文献と同じく子供にとっても適当な書物を用意することが望まれる。これらの本が有用なものであればあるほど、それは意義深いものになる。親や子供が家で読めるよう教室内に書物貸し出しシステムを作っておくとよい。文献目録はこのテーマについて参考とすべき多くの書物の一覧表となる。

講座で使われるスライドやビデオ⁽⁴⁾もまた親が観たいと思うのならそうさせた方がよい。スライド用のフィルムを示す必要はないかもしれないが、フィルムについての議論を乗せている小冊子は役に立つ。もし誰かがフィルムを観たいというのであれば、当該機関はその人のために準備をすべきである。

死に関するパンフレットの幾つかは親が持っていて損のないものである。子供用のパンフレットも存在するし、子供が家に持ってきて見る前に親はそのパンフレットを目にしておくことも大切だ。巻末の参考文献は、パンフレットとその発行機関のリストである。

過去の授業で用いられた絵のついたポスターを親が目に触れられるように示しておく必要がある。それらは葬儀屋や共同墓地を学生が訪ねたときのことを取り上げているだろう。このポスターは子供とこうした場所について話し合うとき、親に考慮すべき要点を教えてくれる。

記録表にある事例、そして評価の形態は親にとって最も有益なものになるであろう。またこれは自分の子供が講座について示す反応に懐疑的な親を安心させることに大きな役割をも果たす。ときには親の方が子供よりも恐れを抱いている場合さえある。書物、パンフレット、スライド用のフィルムそして議論は親たちにこの講座が決してただ怖がらせるだけの体験ではないと安心させる道具となる。子供にとっても、家族全体にとっても積極的な学習体験なのである。

野外学習の打ち合わせ

野外学習は前もって十分な打ち合わせがなされるべきである。教師たちは最終決定がなされる前に可能な限りの死体安置場や共同墓地を訪問すべきである。

もしも集団の規模が小さく、学校機関が承諾するのなら、親が提供する車は葬儀屋や共同墓地への理想的な輸送手段である。小さな集団であることは、学校への帰り道に起こる議論のフォローに非常に都合がよい。

親が車を運転することで、実習の前に子供たちが予想していることについて情報を示すことができるし、場合によっては議論が持ち上がらないとき、どんな質問をすべきかを子供たちに教えることもできる。

このことは、恥ずかしがり屋で敏感であるために大集団では質問することを嫌がってきた生徒にその機会を与えるものにもなる。

この形での輸送法が許されないのなら、教師はスクールバスの手配をしなければならない。バスでは車のような親密な雰囲気にならないが、一方で教師には現地ですてもらいたいことを目的地に着く前に再確認できたり、帰りにねぎらいのことはや補足説明を加えることのできるよい機会となる。可能であれば、教師はバスに付添いの人間の座席を作る必要がある。もしそうできなければ付添いの人は自分がバスではなく自家用車にいることを言っておいてもらうべきである。

親たちには葬儀屋や共同墓地に行くための地図が必要である。葬儀屋では新品でないものを身につけた方が適当であるということを知っていなければならない。管理者やスタッフは子供たちが膝を擦りむくような共同墓地で授業を行いに來たのであろうと思っているのである。

葬儀屋の選定

葬儀屋を選ぶ場合に考慮すべきことが幾つかある。第一にスタッフが教師と同様、その場所で10～11歳ぐらいの子供たちに対し熱意やオープンな気持ちを持って接してくれるかどうか。学生たちが集団で訪ねるのにふさわしい葬儀屋もあれば、メンバーの大半が年老いており、周りに幼い子供がいなかったためあまり適当でないところもあるだろう。スタッフの全てに対して、子供が死体を目にすることのないように、完璧な打ち合わせをしておかなければならない。万一死体を目にして興味を抱いた学生がいたなら、後日親と一緒にまた来るようにしたほうがよい。（むしろそうしなければならない！）

学生たちのグループが必要以上に混雑しないで動き回れる場所を選ぶことも基準になる。どの子供たちも部屋の中を自由に移動することができ、話されていることが聞こえ、何でも目にすることができる。それが大切なのだ。集団が大きすぎるときには、それを分けるべきである。建物のすべてを通して生徒たちを先導できるに足りうるスタッフであると教師が確信できていなければならない。

生徒たちに話しかけている人間は彼らのレベルに合わせて述べていけることが課題となる。洗練されていなくてもよいが、必要な情報の紹介においては事実本意でなければならない。講義の話し手は生徒たちがこれまで観てきたフィルムに精通している必要がある。葬儀屋の代表はその地域に則した問題とその現状について明らかにしてもよい。仕事のあらゆる側面に関する生徒たちのどんな疑問に対しても喜んで答えるべきである。葬儀にかかる費用、謝礼、遺品の処理法、不気味な場面など彼らの意識に上ってくるさまざまな思いを解決しておかねばならない。もしこうしたことの全てを事前に考慮していたならば、予期せぬ振る舞いや態度の全てを最小化していく力になってくれるだろう。繰り返すが、相互理解のあるところには積極的なものの見方があるはずなのだ。

死体置場の管理人は優れたフィルムやパンフレットと最も近い距離にある人であろう。彼らは自発的にパンフレットを配り、スライド用フィルムを貸し出し、他の必要な補助用品を提示してくれるだろう。また講座にふさわしい共同墓地の選択や実習のための事前の打ち合わせに力を貸してくれるだろう。

共同墓地の選択

共同墓地は生徒が多種類の埋葬地を目にすることのできる場所である。沢山の木々にあふれ、よく整備されたところが望ましい。生徒たちが新しい墓碑のみならず古い碑文をも目にする機会が与えられるべきである。大小の墓石や霊廟などが目に入るように。教師が生徒たちの興味をそるような個性的な埋葬地、あるいは有名な埋葬地の地図を作っておくとよいだろう。共同墓地の支配人であれば、ふつうは個性的な埋葬地を指摘していくときに楽しさを感じる。

共同墓地の管理人ないし支配人は、学生に話しかけたり彼らの抱く疑問に答えたりするのに重要な存在である。彼らはまた学生たちの家族が共有する埋葬地の位置を教えてくれる存在であってほしい。都市によっては共

同墓地の代わりに市役所で墓地の登録がなされていることを把握しておくように。墓地を訪れる前にその地域でどのように施行されているか確認しておかねばならない。

家族の墓を訪ね、花や他の望むものを供えたと生徒たちは元気が出てくる。墓地内における適切なふるまいや注意すべきことについて生徒に情報が提示されるべきである。地域内のメンバーがそこにいるかもしれないので生徒は予定された行動をこなす間、おだやかで敬意にみちたふるまいをするべきである。再び言おう。もしも生徒が教師の積極的なものの見方を理解しておれば、彼らは必ず従うはずである。事実、最もよく動いている教師が教えてくれる体験は、子供たちが墓地内に足を踏み入れ、ひざまずき、墓石に書いてあることを読んだり、読もうと墓石をこすったりしているというものである。

共同墓地でピクニックが計画されるときには、事前に打合わせをしなければならない。食堂のスタッフは自分で食事を買ってきている生徒に対し、冷たいものと飲み物を学校側が用意するという旨を予め告げておく必要がある。例えば掃除用のゴミ袋や腰を下ろすための敷布類の準備、予定の時間までに食事を準備しておく方法、そして時間全体の配分といった項目は事前に計画を練る上で重要である。

葬式が野外学習と同じ日に予定されている場合には代替案が必要となる。最初に共同墓地を訪ね、後日葬儀屋を訪れる。または別の場所で一連の計画の通りに行動する。このどちらかの方がよい。生徒たちの予定に対してもしも葬儀が行われているようなら、別の共同墓地に予定を替えたほうがよいだろう。

結　　び

掲げた項目の全てがこの講座において期待される学習体験を学生たちにもたらしてくれる。事前にこうした項目に留意していくことは教師の学生への配慮を可能にし、知的レベルだけでなく情緒面からもこのテーマに教

師がどうかかわっていくかを教えてくれる。

忘れないように。とりわけ教師が学生のころと関わっていくときには、事前の計画が講座全体の成功を左右する。

メモ：

- （１） 第５章：カウンセラーの役割についての全ての議論のために。参照。
- （２） 巻末：「ゲーム」、記録用紙参照。
- （３） 巻末：「参考文献」参照。
- （４） 巻末：「フィルム」「ビデオ」についてのリスト参照。